

I 分 析

I—1 名瀬市における赤崎公園の意義

昭和60年目標における名瀬市の構造は、人口6万、市民一人90万円所得と推定されている。(名瀬1985年より)。このような目標に向って、本市の長期的開発の基本路線は、大島紬による産業振興豊かな自然を生かした観光、都市機能施設の整備、文化福祉行政の推進等が挙げられている。(名瀬市長期総合開発計画より)。これらの施策の一環として、児童公園整備、らんかん公園事業、三儀山総合運動場建設とならんで、赤崎公園の計画が含まれている。前記総合開発計画によると、赤崎公園は昭和44年度から昭和48年度までの4カ年計画で実施されることになっており、亜熱帯樹林、高倉集落、民具の展示、休憩所、展望台等の施設を配し、大型バス通行用の道路改良とともに一大自然公園を建設することになっている。

現在名瀬市における公園緑地の分布は第1図にみられるように僅かであり、昭和60年目標時においては、都市公園法にいう1人当りの3m²公園面積を充すのは容易でない。もちろん都市公園のみが、レクリエーションの主要なものではないが、将来の住宅、産業の発展を考えると、現段階で可能な限りの公園緑地の面積を確保しておくことが必要である。地価の値上りによって最も買収の難しいものだからである。この意味においても、まきがきで触れた如く、赤崎公園の面積は可能な限り大規模に予定しておくことが望ましい。また、三儀山の運動公園と対比し、静的レクリエーションの場として、32haの大きさでは自然の諸条件特に亜熱帯植生を生かした公園計画としては狭い。さらに、名瀬港に対する玄関口として、この地域のもつ公共性の高さは、名瀬を象徴するものであり、大地域にわたって公園地域として将来とも確保しておくことが肝要である。以上の観点から、以下の作業では計画地域を赤崎の岬全体として行なっている。この計画地域の中から32ha分をとりあえずの事業決定を行ない、他を順次公園区域に編入していくことを望んでいる。

赤崎公園地域一帯から朝仁の方へかけて、自然公園の候補地となっている。この一帯は海中公園として広域的レクリエーションの利用対象となっている。昭和43年で名瀬への観光客は約10万人であるが、市は鹿児島観光の延長、沖縄観光の中継点、奄美における観光基地としての条件を考え、目標年次で120万人の観光入込数を想定している。このような大量の観光客に対して、国民宿舎、ユースホステル、共済保養所、民宿等の宿泊施設、キャンプ場海水浴場の整備等が必要になってくる。これらのことは当然、この赤崎公園にも係わってこよう。

さらに史跡、美術工芸、風俗、建築物等の人文資源に富む奄美においては、これらの資源

を保護するための施設の整備も必要になる。このような文化財と、自然の植生景観とを調和させるべき要求も生じよう。

これらの開発、保護、整備の推進に対し名瀬市として考えねばならないことは、単なる物真似的計画に終わらないように心がけることである。例えば、日本のハワイムードを出さんとして外来樹を無定見に導入したり、一時的利益のための安易な観光開発を行なわぬよう注意すべきことである。名瀬には独自の植生があり、文化があり歴史がある。これこそが最大のそして持続的観光資源であって、これらが充分保護される限りにおいて、広域観光に供されるべきである。自らの資源を失うような計画は真の計画とはいえない。むしろ、新しい伝統をつくりあげていくべき努力をこそ計画の中に盛り込まねばならない。

以上のことをわれわれの計画前提として作業を進めた。

I— 2 赤崎地区の分析

イ 主要動線

計画地域へのアプローチは、衛生センター、NHK送電所、朝仁からの道路の三路線があり、これらにより車で到達できる。地区内道路は第3図に示すように、NHK送電所から赤崎までの道路を除き車の進入は不可能である。歩道は歩行頻度により、歩路と歩行可能路に分かれるが、計画地域全体を周遊できる動線はない。

なおアプローチ動線に関連して、スーパー林道との連絡がある。レクリエーションの意味からは金作原国有林域とを結ぶ路線として重要であるが、景観的には問題の多い路線である。

陸上の動線とは別に、不定期的ではあるが、グラスボートによる地域周辺の回遊が行なわれている。

ロ 利用形態

現在当地区内には定期的な利用はない。バスによる到達利便はよくなく、タクシーによるものが多い。利用者は名瀬観光客、家族連が多く、散策および展望が中心である。

駐車に対する用地は殆んどない。現在名瀬市での自動車保有台数は2293台（昭和43年3月末現在）であるが、保有率の増加傾向と、目標年次での1世帯1台目標が実現すれば、ほぼ16,500台の自動車が推定される。これに見合った駐車場は1日の最大利用数を全数の $\frac{1}{10}$ と見込んで、その内の同時利用率を $\frac{1}{5}$ とすれば約330台分の駐車面積を確保しておけば十分であろう。その面積は $330\text{台} \times 30\text{m}^2 = 1\text{ha}$ と概算される。

第1表 名瀬市自動車保有台数推移表

	昭和38年	39	40	41	42	43
乗 用 車	74	99	142	185	295	430
バ ス	37	46	56	63	68	74
普 通 貨 物	91	116	123	161	169	221
小 型 貨 物	307	369	420	541	631	769
軽 自 動 車	222	279	315	429	544	725
特 殊 自 動 車	5	9	14	20	25	31
特 種 自 動 車	15	20	20	24	32	43
合 計	751	938	1,090	1,423	1,764	2,293

ハ 需要施設機能

計画地区内で要求される施設機能としては、長期総合開発計画による高倉集落、民具展示施設、休憩、展望、亜熱帯樹林の他に国民宿舎、キャンプ場のような宿泊施設、郷土館、野外教育センター、野外生態施設のような教化施設、海水浴場のような運動施設、保護樹林、文化財などのための保護修景施設、レストハウス、便所、休憩所のような便益施設、それに管理用の施設といったものが要求される。これらを連絡する動線として、苑路、サイクリング路、棧橋などの交通施設も必要である。

二 自然条件

計画地区は地形的にみると比較的起伏に富んでおり、平坦地が海浜を除き、極めて少い。したがって地形を生かした計画をたてるためには傾斜度の段階による分析が必要である。一般に建築物の経済的立地のためには傾斜度が 10° 以下であることが望ましく、また 10° を越えると道路面の土壌侵蝕が生じはじめる。したがって植生による土壌侵蝕防止を有効にし、かつ特殊な建設工法を行なうとしても、経済的な建設施設用地は、傾斜度 15° 以下の地に求められるべきである。主要道路の立地も、この範囲内に取めるべきである。(第4図参照)

植生については、別途に詳細な調査が行なわれているので詳述は避けるが、第5図に相観を主とした植生図を示す。これによると海浜、海岸断崖地と内陸の溪流沿の一部を除き、大部分が代償植生で被われている。このことは、かつてまたは永年にわたって人為的影響が様々な形で加えられていることを示している。しかし、水田、畑地、急傾斜植林地を除くと、徐々にではあるが自然に近い方に進行遷移を行なっている。したがって、タブ林、スダジイ林、シバニッケイ群落、海浜群落などの自然に近い植生はもとより、風衝スダジイ低木林、ソテツ・シバニッケイ群落なども十分保護の対象として考えねばならない。リュウキュウマツ植林でも比較的傾斜のゆるい地(30° 以下)では林床も豊かになり、土壌も厚いが、 45° 以

上の急傾斜では、土壌の流亡が著しく、立地が悪化している。

土壌については鹿児島県林業試験場大島分場の山内孝平氏の協力を得て、以下のような結果を得た。(第6図参照)

尾根部は赤黄色の乾性土壌で古生層を母材としている。山腹上部の中傾斜地は弱乾性の黄色土で礫を含み下層土ほど礫が多い。海岸の急傾斜地帯は砂礫質の弱乾性褐色森林土である。海岸の緩傾斜地帯は砂質の沖積砂層におおわれ、急傾斜地は崩落した礫土壌である。以上の各土壌型の特徴は次のようである。

① 乾性赤黄色土

尾根に分布して、透水、保水、通気性の劣る強酸性土壌である。土壌分析の結果は第2表のようになる。

第2表 乾性赤黄色土の分析

断面 番号	層位		PH		理学的性質				備考
	名称	厚さ	H ₂ O	KCl	容積重 g/100cc	採取時 含水量	最大容 水量	透水速度 cc/min	
008	B ₁	8 cm	5.1	3.8	170	48 %	58 %	21	透水速度は 100cm ² 当りの 1分間の透水量
	B ₂	20	5.1	3.8	168	44	47	6	
	B ₃	24	5.2	3.8	—	—	—	—	
009	B ₁	40	5.1	3.9	165	48	61	12	
	B ₂	+	5.1	3.9	171	52	61	7	
010	B ₁	15	5.1	3.9	—	—	—	—	
	B ₂	+	5.1	3.9	—	—	—	—	

② 弱乾性黄色土

山腹上部の残積性匍行土で、表層は粗しょうな堆積土で、通気、保水性はややすぐれているが、下層土は緊密な強酸性土壌である。土壌分析結果は第3表のようになる。

第3表 弱乾性黄色土の分析

断面 番号	層位		PH		理学的性質				備考
	名称	厚さ	H ₂ O	KCl	容積重 g/100cc	採取時 含水量	最大容 水量	透水速度 cc/min	
011	A	4 cm	4.6	3.7	106	30 %	48 %	103	透水速度は 100/cm ² 当りの1分間の 透水量
	B ₁	30	5.0	3.7	183	37	50	7	
	B ₂	+	5.1	3.9	193	40	49	20	

③ 適潤性黄色土

山腹上部の凹地に分布し、斜面の地下水が集中してくるので、水分が多く肥沃である。PHは高く、透水、保水性にはすぐれている。

④ 弱乾性褐色森林土

山腹急斜面に分布し、透水性にすぐれており、腐植は深く、A層が発達する。土壌分析結果は第4表のようになる。

第4表 弱乾性褐色森林土の分析

断面 番号	層位		PH		備 考
	名称	厚さ	H ₂ O	KCl	
012	A	18 cm	6.9	5.5	
	B	32	5.1	3.9	

⑤ 砂礫未熟土

沖積砂層はサンゴの風化した砂層で、一般にアルカリ性である。保水性に乏しく通気性にすぐれている。